

髄液細胞数算定における自動分析装置の有用性について

◎山本 紀子¹⁾

熊本大学病院 中央検査部¹⁾

髄液検査は総合病院から大学病院まで多くの検査室で実施され、中枢神経系感染症や腫瘍など、一刻を争うこともあり得る重要な検査である。その検査項目としては一般検査、生化学検査、微生物検査、遺伝子検査、病理検査など多岐にわたっている。その中でも髄液細胞数算定は緊急検査項目であり、時間外検査にて携わる技師が多い。従来、検査法は計算盤による目視法で実施されている。特にサムソン液による希釈手技と細胞数算定の顕微鏡鏡検技術の習得には時間が必要であり、検査技術の維持が課題であることは周知の事実である。

近年、髄液を含む体腔液の細胞数を算定できる自動分析装置を導入する施設が増えている。自動分析装置を使用することは、簡便で迅速に検査できる大きなメリットを有する。また、髄液検査数が少ない時間外検査を担う日当直者をサポートすることができると思う。しかし、髄液検体は採取できる量が少ないため、自動分析装置を使用するにあたり再測定など困難な場合があり、装置の特性を理解して運用する必要がある。

当院では、髄液細胞数算定の自動分析装置の導入にあたり、多項目自動血球分析装置 XN シリーズ (Sysmex) の体腔液測定モード (BF モード) による髄液細胞数検査の基礎的検討の評価を行った。基礎的性能は概ね良好であったが、乖離する検体も認められた。その対応策として、スキヤッタグラムを確認することが挙げられる。スキヤッタグラムの見方やポイントを理解することにより、データの異常や、異常な細胞を疑えることもある。そこから計算盤や塗抹標本の確認をすることにより、信頼性の高い検査結果へと導くことができる。自動分析装置の使用はその特性を理解し、活かすことにより、迅速かつ有用な検査結果報告へとつながると考える。